

# 日蓮大聖人御書全集

はるのはじめごししょうそく

## 春 初御消息

新版  
1928  
〜  
1929

はるのはじめごしようそく

# 春初御消息

こうあん ねん

弘安5年（'82）

がつ にち

1月20日

さい なんじようときみつ

61歳 南条時光

伯耆どの書 せうろう

喜入 せうろう

はわき殿かきて候こと、よろこびいりて候。

はる はじ おんよろこ 喜 入 やま くさ お

春の初めの御悦び、木に花のさくがごとく、山に草の生

い われ ひと よろこ い せうろう

い出ずるがごとしと、我も人も悦び入つて候。さては、

おんおく もの につき こめひとたわら あわしおひとたわら むしもちさんじゅうまい 芋

御送り物の日記、八木一俵・白塩一俵・十字三十枚・いも

ひとたわら た せうら お

一俵、給び候い畢わんぬ。

しんざん なか しらゆき みつか あいだ にわ いちじよう 積

深山の中に、白雪、三日の間に庭は一丈につもり、谷は

峰 てん 梯 架 とり しか あんじち い

みねとなり、みねは天にはしかけたり。鳥・鹿は庵室に入り、

しようぼく やま 差 入 ころも 薄 じき 絶 よる

樵牧は山にさしいらず。衣はうすし、食はたえたり。夜は

寒 苦ちよう 異 ひる さと 出 思 ころも 隙

かんく鳥にことならず。昼は里へいでんとおもう心ひま

どきよう 声 絶 かんねん ころも 薄 こんじよう

なし。すでに読経のこえもたえ、観念の心もうすし。今生

たいてん みらいさん ごご へ 歎 そちら

退転して未来三・五を経んことをなげき候いつるところに、

おん 訪 いのち生 げんざん い そちら

この御とぶらいに命いきて、またもや見参に入り候わん

嬉 そちら

ずらんとうれしく候。

かこ ほとけ ぼんぷ そちら とき ごとくくらんまん

過去の仏は、凡夫にておわしまし候いし時、五濁乱漫の

よ う ほけきよう ぎようじや 養 ほとけ

世に、かかる飢えたる法華経の行者をやしないで仏には

成 たも 見 そちら ほけきよう 実

ならせ給うぞとみえて候えば、法華経まことならば、この

くどく かこ じぶ じようぶつうたが  
功德によりて過去の慈父は成仏疑いなし。

こごろうどの いま りようぜんじようど 詣 合 たま ことの

故五郎殿も、今は靈山浄土にまいりあわせ給いて、故殿

おん 頭 撫 たも 思 そうら

に御こうべをなでられさせ給うべしとおもいやり候えば、

なみだ 搔

涙かきあえられず。恐々謹言。

しょうがつは つか

正月二十日

にちれん かおう  
日蓮 花押

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

もう おそ い そうろう かえ がえ 伯 耆 どの いちいち

申すこと恐れ入つて候。返す返す、はわき殿、一々に

読 聞 そうら

よみきかせまいらせ候え。